留学生が大学入学時に必要な日本語力は何か―「アカデミック・ジャパニーズ」と「日本留学試験」の「日本語試験」を整理する

堀井惠子　k_horii@musashino-wu.ac.jp

はじめに

2002 年 6 月から、留学生に対する入学選考改善のために開発された「日本留学試験」が実施されている。なぜこの試験ができたのか・・については、すでに「「日本留学試験」とその「日本語試験：今後の活用へむけての課題と提案―シラバスと試行試験を分析して」[1]でも、述べたが、この試験の実施責任主体である日本国際教育協会のホームページ[2]には、「留学希望者の負担を減らし、大学などの利用を促進することにより、渡日前入学許可を推進し、留学交流の拡充を図る」とある。平たく言えば、10 万人計画達成をめざし、日本留学の「敷居を低く」したいという主旨のようである。

留学希望者の負担を減らすということは、多いに賛成である。試験を「アカデミック・ジャパニーズ」に特化し、「知識」だけを問わない点、また、実施回数・会場を増やし、複数年利用可能にした点は多いに評価できる。

しかし、公開用問題、試行試験、平成 14 年度第 1 回試験、第 2 回試験それぞれを分析してみると、はたしてこの試験で、大学の留学生の入学選考ができるのか、この試験で入学した留学生が日本の大学で、充分に勉学をしていけるのかという点に疑問が残る。

現在の日本の大学で勉学する能力＝アカデミック・ジャパニーズと「日本留学試験」の問題の間にはギャップがあるのではないだろうか。

「敷居を低くする」ことで試験で問う日本語レベルが低くなってしまっていることは、「日本留学試験と日本語能力試験 1 級・2 級の換算表において、1 級と 2 級の差があまり出ていないことでも伺える。

ランゲージセンター方式のまだ整っていない、また、英語での授業がほとんどない、現在の日本の大学に留学生が入学し、勉学をして行くためには、上級の日本語力が必要である。低い日本語力で入った留学生が、その後、学力・日本語力の両面で伸びていないと言う調査もある[3]。今後、大学側が受け入れ体制を改善して行くべき点もあるが、現時点では、それらは整っていない。

本論では、「日本留学試験」が、大学の留学生選考試験としてより機能するためには、どうしたらよいのかを考えるために、

1. 「日本留学試験」のシラバスの「アカデミック・ジャパニーズ」の意味を確認する。
2. 先行文献により、日本の大学の勉学に必要な能力(=アカデミック・ジャパニーズ)が何なのかを確認する。
3. 「日本留学試験」の日本語の問題を、TOEFL と比較しながら分析する。
4. 「アカデミック・ジャパニーズ」と「日本留学試験」のギャップを考える。

というながれから、大学入学時にどのような日本語能力が最低限必要かを浮き彫りにした上で、「日本留学試験」の改善案を提案、さらに、大学の日本語教育・日本語予備教育へのウォッシュバックをおさえていきたい。

「日本留学試験」と「アカデミック・ジャパニーズ」を考えることによって、日本語教育や留学生教育をよりゆたかにしていけるよう、関係者の関心がもっと集まることを期待している。

---

[1]堀井惠子 2002「日本留学試験」とその「日本語試験：今後の活用へむけての課題と提案―シラバスと試行試験を分析して」『留学生教育』第 7 号

[2] http://www.aiej.or.jp

[3] 水本光美・池田隆介 2001「日本語能力試験 2 級レベルの学部留学生が抱える問題点―理工系学部留学生のケーススタディ」『専門日本語教育研究第 4 号 b』

１．「日本留学試験」でいう「アカデミック・ジャパニーズ」とは何なのか。

「アカデミック・ジャパニーズ」ということばは、日本留学試験の日本語「シラバス」[4]に使われたことで、注目されはじめた。「シラバス」では「外国人留学生として日本の高等教育期間、特に大学学部に留学を希望する者が、日本の大学での勉学に対応できる日本語力(アカデミック・ジャパニーズ)をどの程度習得しているかをシングルスケールで測定する事を目的とする。」とし、「日本語によるコミュニケーション能力があるかどうか、日本の大学で学習・研究活動を行うための日本語能力があるかどうかを測定する言語テスト・標準テスト」(日本語シラバス・測定対象能力より)であるとしている。

「シラバス」には、概念図とともに

Ⅱ試験が想定する課題の類型：１指示実行、２事物特定、３事物描写、４事物比較･配列、５物事の推移・展開予測、６物事の背景・意図把握、７物事の構造化・法則性発見、8 その他

Ⅲ言語技能：4 技能＋「翻訳する」

Ⅳ言語下位技能：１情報全体の流れを捉える、２情報の全体を、ある判断や評価をしながら捉える、３特定の情報を抽出して捉える、４推測しながら情報を捉える、5 予測しながら情報を倒れる、６その他

Ⅴ試験に含まれる表現類型(テキストタイプ)１書き言葉（標示・ポスター・カタログ･新聞・手紙・板書・図表・・）、２話し言葉（対人関係作り、放送メディア、講義・・・）

Ⅵ試験にあらわれる話題(トピック)：１紹介と確認、２大学・学習環境、３住宅、４住宅の近隣社会、5 広域の地域社会、６文化遺産、７個人に関して、８自国と日本との二国観関係およびグローバルな国際関係、９自国と日本の社会・文化との差異、10 言語表現の差異(時刻の表現、同意・・)

Ⅶ試験に現れる場面：１場所、2 時間・時期、３対人関係、４対人形態、５媒体

Ⅷ試験にあらわれる言語的要素：１日本語の文法、２日本語の音声、３日本語の文字・表記、４日本語の語彙、５日本語の文章・談話、６各種略語･記号･外国語

Ⅸ試験にあらわれる非言語的要素(視覚情報関連)：１写真、２イラスト、３アイコン(絵文字)、４その他

Ⅹ試験の課題を達成するために前提となる知識１文系の知識(世界史、日本史、現代社会、倫理)２理系の知識(数学基礎、理科基礎)

などが網羅されているが、正直言って、これだけで、この「アカデミック・ジャパニーズ」を充分に理解するのは難しい。西原[5]は、「アカデック・ジャパニーズ」を「日本の大学で支障なく学習・研究生活を行うための能力：日本語によるコミュニケーション能力、日本語を媒体とした思考能力を測定。日本語そのものの知識・能力を問うものではない。設問は主旨を問う、課題達成が主軸、題材は学習生活だけでなく、キャンパス生活、地域の社会生活など、留学生が遭遇するであろうさまざまな場面･トピックが含まれている。」と述べている。また、加藤[6]も、「アカデミック･ジャパニーズとは、日本の大学での勉学に対応できる日本語力であり、日本語によるコミュニケーション能力と認知能力を含む。一般に言語の機能には、伝達(communication)と認知(cognition)の両極面、すなわち情報を伝達する機能と思索する機能があると考えられる。したがって、コミュニケーション能力とは情報の伝達技能を意味し、認知能力は情報を知的に再構成する能力のことだと考えられる。・・・アカデミック･ジャパニーズの能力とは、日本の大学や地域社会での日本語によるやりとりの能力に加えて、世界を分析し、分析したものが互いにどう関係しているかを考え、新たな意味を発見したり付加したりする認知能力を内包するものと捉えることができる。」と述べている。

---

[4] 『日本留学のための新たな試験について一渡航前入学許可の実現に向けて』(2001)「日本留学のための新たな試験」調査研究協力者会議

[5]西原純子 2001「日本留学試験の目的」『月刊日本語』2001 年 12 月号

[6]加藤清方 2002「高等教育の国際化と日本語教育の課題」『留学交流』2002.3

これらから読み取ると、「日本留学試験」でいうアカデミック・ジャパニーズは「日本の大学で勉学するのに必要な日本語力＝コミュニケーション能力＋思考(認知)能力であるので、「日本留学試験」はそれを問う試験ということになる。

２．大学で必要な日本語力とは

現在、大学学部で行われている日本語教育（留学生センターの予備教育を除く）は、日本語能力試験１級合格など、ある程度の日本語力を持つ留学生が、並行して、他の一般教育や専門教育を受けるにあたっての「橋渡し」として、さまざまなスキルを高めようというものが多いのではないだろうか。近年、この「橋渡し」を目的とする、学部や予備教育での日本語教育のためのテキストがどんどん出ている。それらのテキスト２７[7]を見てみると、

> 本教材は、日本の大学で学ぶ留学生が直面する学習場面での問題や、日本人の先生などとのインターアクション(相互交渉)の問題を解決し、自律的に学習する一助となるように作られたものである。・・・・
> 日本の大学で学ぶためのストラテジー(学習方法)を大きく二つに分け、練習を通して学べるようにした。・・・講義、演習(ゼミ)、図書館などの学習場面で、大学の科目を日本語で勉強するために直接必要になるストラテジー(たとえば、黒板に手書きされた字を読む方法、ノートのとり方など)、・・キャンパス内外における先生や学生などとのインターアクション場面で、学習ネットワークをつくるストラテジー(たとえばあいさつや質問のし方など)を取り上げた。
> ピロッタ丸山淳他 1996『大学の授業へのパスポート』凡人社

> 本書は、日本の大学、短大、大学院で学ぶ留学生が日本語でレポートを書いたり、口頭発表を行ったりする際に必要とされる技能を養う事を目的として、開発されたテキストです。
> 斉山弥生・沖田弓子 1996『研究発表の方法』凡人社

> 日本の大学生活におけるさまざまな場面を擬似体験する中で、日常生活・留学生活に必要なスキル(生活スキル：オリエンテーション・掲示板など情報読み取り・教務手続き・先生とのやり取り)と学術研究活動に必要なスキル(学習スキル：講義、資料読み・演習、スピーチ,討論、レポート)が自然に見につくように構成してあります。・・・
> 佐々木瑞枝他 2001『アカデミック･ジャパニーズ』ジャパンタイムズ

> 勉学・研究のための日本語運用力を養成する目的で作成、学習者が自分でテーマを探して調査、考察、発表することを目標、そのプロセスで、情報収集、情報伝達、調査分析、原稿作成、発表などのスキルを養う。トピックはそのための手段
> 佐々木薫他 2001『トピックによる日本語総合演習中級前期（中級後期・上級・上級用資料集）』スリーエーネットワーク

などとある。ここには、「日本の大学の勉学に必要な力」があらわれているといってよいだろう。

また、札野ら[8]の調査では、大学の「日本語教育で指導を強化すべき上位項目」として、「ノートを取る、論文を書く、論文の要旨をまとめ、レポートを書く、専門用語」があげられている。その他、山本[9]による調査も、参考になる。

---

[7] 文末のアカデミック・ジャパニーズに関するテキストのリスト参照

[8]札野寛子・辻村まち子 2003「大学生に期待される日本語能力に関する調査について」『日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成　報告書』国立国語研究所

[9] 山本富美子 2002「社会科学系学術日本語教育と異文化間コミュニケーション教育の接点」『ポリグロシア』No.5,立命館アジア太平洋大学間語教育センター

これらから、「アカデミック・ジャパニーズ」が日本の大学での勉学に必要な日本語力であるならば、そこには、まず、①学習を行うための、講義理解、レポートを書く、口頭発表をするなどの日本語能力（スキル）と、②学習を行うためのネットワーク作りのためのコミュニケーション力が含まれているということになる。

これをより具体的にしてみると、

①-1 講義を聞き取り理解する→講義のキーワードを捉える、講義のメモ・ノートをとる、講義の要旨をつかみ、課題を達成する

①-2 大量のテキスト、資料、参考文献の読解

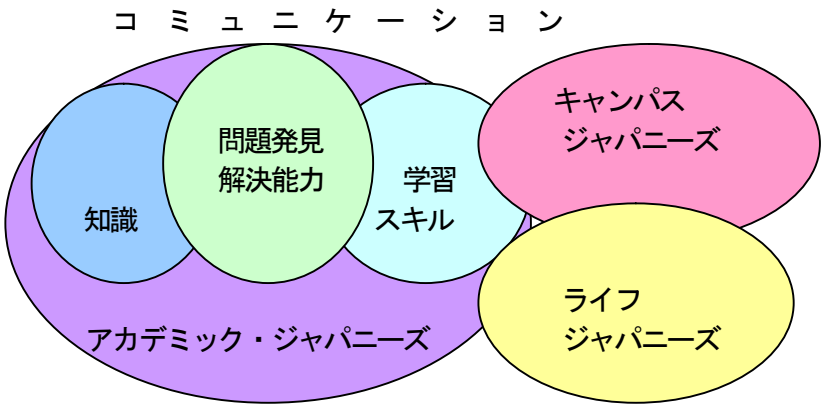
①-3 レポート・論文、発表のための情報収集

①-4 レポート・論文、発表をわかりやすく書く・伝える

② 人間関係を作る会話：ノートを見せてもらう、わからないところを教えてもらう、授業の前後に先生と話す、事務職員と話すなど

にまとめられる。

じつは、何語であっても、アカデミック能力というものが、あるはずである。ここでの、アカデミーとは「高等教育」であるから、アカデミック能力とは、「高等教育機関で学問をする」ために必要な能力である。それは、基礎知識＋問題発見解決能力＋スキルといってもいいのではないだろうか。これを日本語で行うのが「アカデミック・ジャパニーズ」としてみる。その場合、「スキル」とは、上記①に上げたような具体的なものや、聴解、読解などでの、要点・要旨把握力(スキミング・スキャニング)や推測力、情報収集能力につながるものなどである(「アカデミック・ジャパニーズ」を学習スキルのみ、また、問題発見解決能力＋学習スキルのみとする考え方もできる)。



さらに、問題点を整理するために、大学生活に必要な「日本語」力を「アカデミック・ジャパニーズ（AJ）」「キャンパス・ジャパニーズ（CJ）」「ライフ・ジャパニーズ（LJ）」の３つのカテゴリーにわけてみたい。「シラバス」では「アカデミック・ジャパニーズ」に、「キャンパス・ジャパニーズ CJ」「ライフ・ジャパニーズ LJ」がみな含まれ、「生活スキル」にコミュニケーション・ストラテジーが、「学習スキル」に「事務手続き処理能力：入学・受験・履修手続き」が入っているが、「キャンパス・ジャパニーズ」のカテゴリーがあったほうが、問題点を見つけやすい。

「日本留学試験」の説明時には、上記のカテゴリー「アカデミック・ジャパニーズ AJ」は渡日後に学べばよいような発言も漏れ聞いた。また、今までの試験では「ライフ・ジャパニーズ（LJ）」[キャンパス・ジャパニーズ CJ」が重要視されているが、はたしてそれでいいのであろうか。CJ はむしろ渡日後、大学入学直前後に体験的に学んでもよいのではないだろうか。AJ を持たずに入学した留学生を、ランゲージセンター方式の確立していない日本で（現在の国立大学の留学生センター、留

学生別科は趣旨が違う）誰がどのようにフォローするのだろうか。

前述のように、大学の学部の日本語教育では、アカデミック・ジャパニーズ（AJ）のスキルをより獲得するための授業が行われていることが多い。しかし、通常、日本語の授業は、大学の他の授業と並行して行われているので、週 1,2 コマ程度であることが多いので、大学入学後の日本語の授業だけでアカデミック・ジャパニーズを身につけるのはむずかしいし、並行して行われる大学の他の授業の理解が非常に困難になる。留学生には、入学前に、最低限、**ある程度のアカデミック・ジャパニーズ、つまり、①－１の講義が「ある程度」理解できる、①－２の文献が「ある程度」読める、また、教員や職員、そして、日本人学生とのインターアクションができる程度の日本語力を持っている必要があるといえるだろう**。そうすれば、その後の日本語の授業で補いながら、大学の授業にスムーズに入っていけるのである。しかし、現在の、「日本留学試験」は、これらを問う問題になっているのだろうか。「日本留学試験」では、問題発見解決能力につながる思考能力や、潜在能力・基礎能力を問うとも言っているが、それを問う試験になっているのだろうか。

３．日本留学試験問題の分析—TOEFL と比較して

「日本留学試験の「日本語」を TOEFL と比較して：「アカデミック」言語力をどう問うか」[10]で、以下のように述べた。

TOEFL Bulletin2002-03 年度版に「4400 以上の世界中の短大や大学の入学にそのスコアが要求されている」とあるように、TOEFL は主に北米の大学・大学院に留学を希望する外国人学生が授業についていける英語力をもっているかを評価するテストとして使われている。英語を公用語とする世界の人口 27%に対して、日本語 2%という、英語と日本語の汎用度の違いや、アメリカだけでも留学生数 52 万人(1999)対日本の留学生数(2002 年で 95500 人)の違い、近年、TOEFL が CBT：Computer-Based Testing としてコンピュータ操作による受験をとりいれ、さらに、リスニングはコンピュータアダプティブ(受験者の解答に合わせてコンピュータが次の問題のレベルを選ぶ)という形へと進化している点、また、TOEFL が 1964 年からの 38 年の歴史と 2500 人を越える専門の研究者集団を持つ点など、単純には比較できない面もあるが、「日本語試験」が「日本の大学での勉学に対応できる日本語力(アカデミック・ジャパニーズ)を測定するテスト」であるということから、比較に値する、また、今後の「日本語試験」の改善策を考える上での参考となるものとして、問題内容や形式を比較し、考察した。

そして、TOEFL にあって「日本語試験」にないものを、以下のようにあげた。

① 文法・語彙などの知識を問う問題がある。
② 長文・複数設問がある：長さと内容
③ レベルの幅とバリエーションがある。
④ テキストや講義など、授業に直接関係のある内容が多い。
⑤ 推測・予測を問う設問が多い。
⑥ 問題数が多い。難度の巾がある。
⑦ 記述問題の記述量が多い。

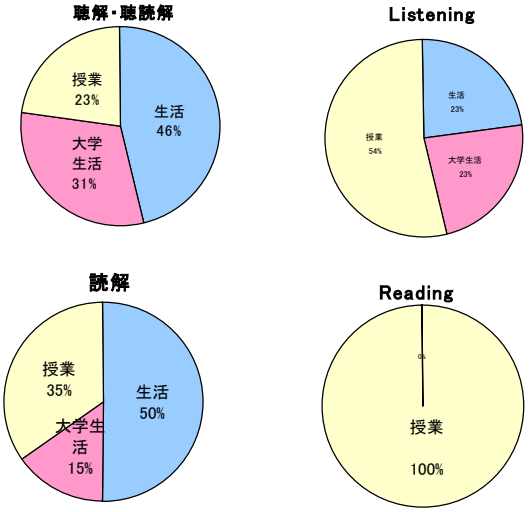
別表１は、平成 14 年度第 2 回日本留学試験の「日本語」の問題を分析したものである。
問題内容のカテゴリーでは、記述を除いた、聴解、聴読解、読解 60 題のうち、授業に関する(AJ)問題が 4,5,7 で計 11 題（18.3%）、大学生活に関する(CJ)問題が 4,8,3 で計 15 題（25%）、一般的な生活に関する(LJ)問題が 11,7,10 で計 28 題(46.7%)であった。
これを、TOEFL(ModelTest4)[11]と比較したのが下のグラフ１である。

---

[10] 日本語教育学会秋季大会予稿集 2002

[11] Barron's"How to Prepare for the TOEFL TEST"9th ed.

グラフ１　日本留学試験　　TOEFL



ここでは、「日本留学試験」の聴解と聴読解を合わせて TOEFL の Listening と比較してみた。「日本留学試験」では授業に関するものが 23%であるのに対し、TOEFL では、約 2 倍の 54%である。また、「日本留学試験」の読解では、授業に関するものが 33%であるのに対し、TOEFL の Reading では 100%が授業に関するものであった。「日本留学試験」では、TOEFL に比べて「一般的な生活に関する」問題が、聴解・聴読解、読解において非常に多く、「授業に関する」問題が聴解・聴読解で TOEFL の 1/2、読解で 1/3 だということがわかる。

ここでは、上記のちがいの④に関するものをあげてみたが、高等教育機関への入学を測るものとしては、「授業に関する」問題がもっとあったほうがいいと思われる。また、その他の、TOEFL にあって「日本留学試験」にないものは、本当になくてよいものなのだろうか。非常に疑問が残る。

４．「アカデミック・ジャパニーズ」と「日本留学試験」のギャップ

「日本留学試験」が、「アカデミック・ジャパニーズ」を問うものであるならば、その問題は、TOEFL と同程度のレベル・内容がなければいけないはずである。入学後、日本語科目を履修できることを多少考慮しても、入学時には、「講義の理解、レポート作成、口頭発表などを行う」ことが充分にできるようになる可能性が高いこと、また、「学習を行うためのネットワーク作りのためのコミュニケーション力」があることが、問われるべきである。しかし、残念ながら、現在の「日本留学試験」では、それらが問えていないといわざるを得ない。「アカデミック・ジャパニーズ」と「日本留学試験」の間にはギャップがある。したがって、きちんと教育をしようとする大学からは、「独自試験」を今まで以上にしっかりしなくては・・という声が聞こえてくる。一方、留学生入試担当者が試験の実態を知らない大学もあると聞く。また、「とにかく留学生を入れたい」大学にとっては、留学生を入れやすい試験として都合がよいと見られているとも聞く。

もちろん、ランゲージセンターシステムが整っている大学や、何らかの補習体制を持っている大学であれば、「アカデミック・ジャパニーズ」を十分に持っていない留学生を入学させても問題はない。留学生教育としては、各大学がそういう機能を持って行く方向が望ましいと思われるが、しかし、現実には留学生に関わる予算が増えて行くとも思えないことから、この面での改善もあまり期待できないであろう。

ということは、「日本留学試験」の改善が、必要なのではないだろうか。「留学希望者の負担を減らし、大学などの利用を促進する」ためには、まず、各大学が「日本留学試験」のみで、入学選抜を行えるようにすることではないだろうか。

「日本留学試験」の「シラバス」にあげてあることは、複雑ではあるが、今までにない新しい試験の形を示している。しかし、それを、作問に結び付けて行くのが、難しいのではないかと思われる。　大学で必要な「コミュニケーション力」をどう問うか。「アカデミック・ジャパニーズ」の「スキル」をどう問うか、「論理的思考力」をどう問うか、どれも、具体的な場面での分析にそった、実態的な作問研究が必要であろう。大学での日本語教育に携わるものの、作問参加、作問研究が求められる。

ここでは、現時点でも改善可能な、以下の点を提案したい。

① 授業関係のトピックの比重を増やす。
② 漢字･語彙の知識もある程度は問う。
③ 大学の授業に合うように、難度をあげる。もしくは、難度レベルの巾を作る。そのために、複数設問を設ける。

５．大学の日本語教育・予備教育で、何を扱うか。

「日本留学試験」のウォッシュバックとしても、大学における日本語教育、および、日本語予備教育の内容を再考し、それにあった教授法やテキストを充実する必要があるだろう。

大学の日本語教育では、並行して行われる大学の他の授業にスムーズに入っていける事を目的とする。一方、大学入学を目指す予備教育では、一定の「アカデミック・ジャパニーズ」の獲得を意識した授業を行っていくのが望ましい。ここでは、日本語予備教育機関と大学との連携も大切になってくる。また、両者の連携による作問研究も、効果があるだろう。

６．おわりに

留学生十万人計画の達成は確実となったようだが、今後は日本留学の「質」が問われてくるだろう。質のよい留学生を敷居を低く受け入れたい、渡日前入学許可を推進したいという行政側の願いはよくわかる。しかし、現実の大学の受け入れ体制が、変わらないまま、現行の「日本留学試験」のみで、入学選考をすれば、日本留学の「質」はあやうくなるだろう。

教授の一方的講義を代表とする受身の授業がまだ多いこと、留学生よりも「アカデミック・ジャパニーズ」に欠けるかもしれない多くの日本人大学生に対する教育方法の改善など、現在の日本の大学教育が抱える問題点にも、留学生教育の「質」の向上と合わせて対処しながら、「アカデミック・ジャパニーズ」を考えることによって、日本語教育・留学生教育・日本の大学教育をよりゆたかにしていくことが、大学の日本語教育に携わるものの使命であろう。具体的な「日本留学試験」の改善案を問題集の形で提案して行くことと、「アカデミック・ジャパニーズ」の視点からの日本語教育の実践研究が、私の今の課題である。

アカデミック・ジャパニーズに関するテキストのリスト

１．産能短期大学 1988『講義を聞く技術』産業能率短期大学出版社
２．産能短期大学 1990『大学生のための日本語』凡人社
３．佐々木瑞枝・門倉正美 1991『日本社会再考』北星社
４．飯野清士他 1992『キャンパス・ジャパニーズ』専門教育出版
５．ピロッタ丸山淳他 1996『大学の授業へのパスポート』凡人社
６．斉山弥生・沖田弓子 1996『研究発表の方法』凡人社
７．浜田麻里他 1997『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
８．倉八順子 1997『日本語の表現技術　読解と作文上級』古今書院
９．三浦昭・岡まゆみ 1998『中・上級者のための速読の日本語』The Japan Times
10. 鎌田修他 1998『中級から上級への日本語』The Japan Times
11. 二通信子・佐藤不二子 2000『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
12. 佐々木瑞枝＋横浜日本語研究会 2000/6『日本語パワーアップ総合問題集』ジャパンタイムス
13. 三浦昭・ワット伊東泰子 2001『日本を知ろう』アルク
14. 佐々木瑞枝監修 2001 アカデミックジャパニーズ日本語表現ハンドブックシリーズ③『予測して読む聴読解』⑥『会話で覚える形式名詞』アルク
15. アカデミックジャパニーズ研究会 2001『大学･大学院留学生の日本語①読解編②作文編③論文読解編④論文作成編』アルク
16. 日本語教育振興協会 2001「運用能力獲得のための基礎日本語教育」―進学希望者を対象として
17. 佐々木瑞枝他 2001『アカデミック･ジャパニーズ』ジャパンタイムズ
18. 佐々木薫他 2001『トピックによる日本語総合演習中級前期・中級後期・上級・上級用資料集』スリーエーネットワーク　　（佐々木倫子＆専修大学グループ）
19. 山本富美子他 2001『国境を越えて』新曜社
20. 近藤安月子・丸山千歌 2002『日本への招待』東京大学出版会
21. 新試験研究グループ 2002『日本留学試験標準問題集』UNICOM
22. 日本留学試験問題研究会編 2002『チャレンジ総合科目・聴読解日本留学試験対応』図書刊行会
23. 佐藤嗣男他 2002『日本語表現ガイダンス』おうふう
24. 上村和美他 2002『知へのステップ』くろしお出版
25. 佐藤政光他 2002『にほんご作文の方法』第三書房
26. 日本留学試験標準問題集　読解問題　ユニコム
日本留学試験標準問題集　聴読解問題　ユニコム
日本留学試験標準問題集　聴解問題　ユニコム
27. 日本留学試験対策スコアアップ問題集　アルク

別表１　　平成１４年度第２回日本留学試験「日本語」の分析

A	授業に関するもの
C	大学生活に関するもの
L	一般的な生活に関するもの

＊聴覚材料で何も書いていないところは informal な会話.F は formal な会話

聴解

	A	C	L	話題	聴覚材料
1			●	レポートの翻訳・確認の電話依頼	留守電
2			●	海外旅行・どこにするか	
3			●	先生の家訪問の誘い	
4		●		学生証再発行の条件	
5		●		レポート締め切り曜日	F
6			●	お昼ご飯の場所	
7			●	食堂での注文間違えへの対処	
8			●	引っ越してきた人についての苦情処理方法	
9			●	激励	
10			●	指の怪我の対処	
11			●	テーブルマナー講習会の誘い	
12			？	レストラン経営で大切なこと	インタビュー
13			●	スーパーのサービス内容	アナウンス
14	●			講義「マラソンの死点」の内容把握	講義
15		●		英語のクラスについての悩みの内容	
16			●	歯医者の予約時間	
17	●			講義「ありの比率」	講義
18		●		ゼミについてのアドバイス内容	F
19	●			研究雑誌への執筆応募方法	説明
20	●			講義「カウンセリング」の内容把握	講義
	4	4	11		

聴読解

	A	C	L	話題	聴覚材料	視覚閣材料
1			●	卒業パーティ会場選び		ちらし
2			●	空港からホテルまでのバス選び		時刻表
3		●		パソコン教室選び		表
4		●		電子辞書の使い方の順番		図
5			●	自転車の置き場		地図
6			●	ボランティア活動応募		掲示
7		●		辞書選び	F	メモ
8		●		演劇教室経の参加		お知らせ
9		●		面接メモ	F	メモ
10			●	ツアー選び		パンフレット
11			●	テニスにかかる費用		説明書
12		●		募集要項希望ハガキの書き方	F	はがき
13			●	自転車選び		価格表
14		●		奨学金申し込み		掲示
15		●		ゼミの学習室に予約		表
16	●			講義「カルテの開示と患者の行動」	講義	グラフ
17	●			調査計画の変更方法	F	アンケート用紙
18	●			講義「森の木」プリントの個所	講義	プリント
19	●			講義「ＩＴ技術」のチャート化	講義	チャート
20	●			講義「世界遺産」メモの間違い部分	講義	メモ
	5	8	7			

読解

	A	C	L	話題	視覚材料
1			●	恵子さんとＥメール	
2		●		バス旅行	お知らせ
3			●	家電リサイクル法	
4			●	人間関係の維持方法	
5			●	恩師へのラオさんの近況報告	手紙
6			●	人間の行動	
7		●		図書館館内ツアーの案内	プリント
8			●	プロについて	
9			●	腕時計	
10		●		大学の説明	
11	▲			海と生物	
12	●			日本の森林	
13			▲	外国語と海外旅行（文化）	
14			▲	設置希望施設についての調査報告	
15	▲			砂漠	
16	▲			白目の役割（コミュニケーション）	
17	▲			アンケート調査の注意点	
18			●	発想のゆたかさに必要なもの	
19	▲			文化	
20	▲			渡り鳥	
	7	3	10	？？	

＊L：一般的な読み物、A：授業で使われるもの

記述

1		外国で仕事をする場合、その国のことばが上手に話せた方がいいか、仕事に必要なだけでいいか。	どちらに賛成か。 どちらかの立場に立って 賛成理由を書く。400 字
2		農薬の使用の是非	